

はじめての

万葉集

[vol.32]

日本に現存する最古の
和歌集「万葉集」を
わかりやすく紹介します。

家なるものは… 芋？妹？

蓮は美しい花で私たちを楽しませてくれる一方、その実や地下茎であるレンコンは、野菜としても馴染み深いものです。古代の人々にとつても、蓮は身近な植物だったようです。

古代では「蓮」はハチスと訓まれ、その葉は食べ物を盛るお皿として用いられました。『万葉集』巻十六・三八三七番歌の左注には、「ここに饅食は、盛るに皆荷葉を用ちてす」とあり、宴会のごちそうを、蓮の葉に盛りつけたことが記されています。おそらく、意吉麿もいづれかの宴会に参加し、みごとな蓮の葉を目にしたのでしょう。その立派な蓮の葉に比べたら、わが家の蓮は芋の葉のようだと謙遜し、もてなしてくれたのでしよう。

つまり、この歌は蓮の葉をとおして宴の主人のもてなしと、その奥方の美貌を同時にほめるという、二重の意味を持っているとも考えられるのです。まさに、即興歌の名人・意

た宴の主人をほめているのです。

目の前にある物の中から即座に歌の素材を選び、その場にふさわしい首に仕立てあげるだけでもかなりの腕前ですが、実はこの歌、蓮に美しい女性が暗示されているのではないかという説があります。美しい蓮に美女の姿を重ね、それとは対照的なわが家の芋——妹(妻)であることよど、「芋」に「妹」が隠されているとも解釈できます。「芋」は平安時代の辞書『倭名類聚抄』に「以閉都以毛」(家つ芋)とあり、里芋のことを指すとされます。意吉麿は、蓮のように美しい奥様に比べたら、わが妻はまるで芋のようです、と戯れたのでしよう。

(本文 万葉文化館 大谷歩)



味問い合わせ

問 県マーケティング課
☎ 0742-27-7401
FAX 0742-26-6211

問 県広報広聴課 ☎ 0742-27-8326 FAX 0742-22-6904

はちす
は

蓮葉はかくこそあるもの 意吉麿が家なるものは芋の葉にあらし

長忌寸意吉麿

卷十六 三八二六番歌

訳 蓮の葉とはこのようにこそあるもの。
意吉麿の家にある蓮の葉は芋の葉のようです。

味問い合わせ



「和歌に関連するものを紹介するよ!!」

万葉ちゃん

「味問い合わせ」は、田原本町などで生産される里芋の一品種です。球状で大きな芋をたくさんつけます。昭和初期に、田原本町味間の生産者が、県農事試験場(現在の県農業研究開発センター)から最も有望な里芋の種いもを譲り受けて栽培がスタートし、平成26年には「大和の伝統野菜」に認定されました。煮物や味噌汁、田楽や蒸し芋として最適です。味間いもは、県内では「JAならけん味間にこにこ農産物直売所(田原本町味間)」などで購入できます。